



CONTENTS

退任に寄せて	馬場忠雄	2
退任教授「在任中の思い出」	西 克治・野坂修一・岡部英俊・三ツ浪健一・安田 齋・犬伏俊郎	4
第3回Home Coming Day	小島秀人・武内 一・石井 潤・寺田雅彦	10
同期会 卒後30年会（医3期生）	倉岡節夫・下田和孝	17
卒後20年会（医13期生）	一瀬真澄・岩佐葉子・坂野祐司	18
卒後10年会（医23期生）	戸嶋一郎・福島 豊・久松隆史	19
卒後10年会（看7期生）	滝川 薫・西脇小百合	21
支部会 関東支部会	馬場直子・勝部志郎・坂野嘉紀・七里圭子	22
Refresh／趣味の話題	藤井秀則	24
私の仕事場	内田 直	26
キャンパス情報	永田 啓	27
事務局から	総会報告 ほか	28

退任に寄せて

滋賀医科大学 学長 馬場 忠雄



2008年(平成20年)4月に学長に就任し、6年の任期を終え、本年3月に退任いたします。1978年(昭和53年)10月、附属病院の開院に伴い、本学の第二内科(現 消化器・血液内科)に講師として赴任して以来、約35年間本学にお世話になりました。その間、2001年4月から吉川隆一学長のもとで副学長(教育等担当)、2004年に法人化され、理事(副学長)さらに学長として、学生はじめ全構成員の皆様にご指導、ご支援、ご協力を得、また自分自身もそれぞれの職務において、新しい課題について学習しながら全力をあげて取り組んできました。

2009年度補正予算による地域医療再生基金のもとに、東近江医療圏域における再生計画が立案され、東近江総合医療センター構想の基に、本学の寄附講座として総合内科、総合外科学講座を設置し、本学各科のご協力により、地域医療の充実と学生や研修医の教育病院としての機能を持つに至っております。本年4月からは、大学の講座として継続することになります。

また、病院の再開発も2012年3月に終了し、手術室、NICU、GCU、ダヴィンチSi、PET-CT、など、ハード、ソフト面とも大幅に改善され、地域のニーズに合った病院機能を有しています。

医学科においては、1998年度から推薦入学において全国に先がけて地域枠が設けられ、2009年度には、県の奨学金による地域枠入学者は5名、さらに、2010年度に5名増となり、在学中には、NPO法人滋賀医療人育成協力機構の支援で地域との係わり合いを学び、地域医療の魅力と重要性を認識し、滋賀地域医療支援センターと共に、地域医療の充実に取り組む体制となっています。

一方、基礎医学を専攻する基礎研究医の育成を目指し、2011年度から研究医枠として、入学定員を2名増員しました。

看護学科では、2011年保健師助産師看護師法の一部改正にともない、看護師課程70名に対し、保健師課程(定員30名)、助産師課程(定員8名)が選択制となりました。

法人化後、各大学は機能強化を強く求められ、本学ではSUMSプロジェクトにまとめ、特色ある教育、研究、診療などにおいて、国立大学としての存在意義を明確にしています。本学は、地域基盤型教育を基本に、研究では、分子神経科学研究センター、動物生命科学研究センター、アジア疫学研究センターなどを中心として、また、特色ある各個研究と合わせて、1人当たりの論文生産性も高い。病院機能においては、全国1,205病院中2位(国立大学で1位)であり、先進的、先端の医療が行われ、地域医療に貢献しています。また、国

際的にも、ベトナムやモンゴル、インドネシアなどでの医療協力も行われています。さらに、地域の小・中・高校との連携や市民対象の公開講座など医療、看護分野で健康や病気に関する啓発活動も行われています。

学長就任時から、法人化後、湖医会による大学支援が特に大切と考え、関東支部会には、毎年出席し、また新たに結成された鹿児島支部には、お招きいただき大学の近況を報告してきました。大阪支部も結成されています。ホームカミングディも、湖医会30周年を機に、平成23年から毎年行っていただいております。湖医会の会員による各支部活動の活性化こそ、本学のさらなる発展につながるものと信じております。

湖医会会員の皆様のご活躍を期待しております。





午前3時起床が無くなる日

社会医学講座(法医学)教授 西 克治

在職中、法医学への理解を深めて貰うため努力はしたつもりであるが、大学、教員、学生の理解度は今ひとつの状態のままであるように思われてならない。法医学啓蒙の点では合格点に達しなかったと反省している。一方、教室に出入りしてくれた学生が思ったより多かったのが幸せであった。入学直後から卒業まで法医学解剖に興味を持ってくれた看護学科生、卒論を作り論文までにした看護学科生、監察医解剖で解剖補助をしてくれた15名を超える学生達。自主研修結果を論文にまとめた複数の学生、学外臨床研修で外国に行ってくれた複数の学生。強烈な記憶・出来事となった再入学学生からは、結婚の報告が寄せられた。基礎研究医枠登録学生のドイツ派遣とドイツ法医学会参加。いずれも、楽しい思い出となった。複数の国試浪人経験者は、それぞれ人情味溢れる医師になってきている。皆様の今後のご多幸を祈念いたします。

在職中に卒業生が山口大学、卒業・在籍者が徳島大学の法医学教授に就任してくれたことを「湖医会」に報告出来ることもうれしい限りである。後任が、卒業生では無かったことを強く反省している。将来、「卒業

生が学長に」と希望し、退職する。

因果なもので、何時、警察からの解剖依頼が入るか不明で、23年間の在職中、外国出張期間中以外は、常に、解剖準備態勢であった。解剖が終わると、鑑定書の作成が始まる。鑑定書は、自宅で作成していたので、午前3時に起床、解剖写真を広げながら、出勤までは文筆業であった。容疑者拘留期間中に提出することとしていた故、通常、解剖後7日までには提出していた。多数死亡事故後は、ほぼ、徹夜であった。

4月からは、日課の早朝起床と定期券が無くなる。体調・時間管理は出来るであろうか。とにもかくにも、割愛のために奈良県橿原市までお越し頂いた佐野晴洋先生との「定年まで」のお約束が果たせそうなことで十分としなければ……感謝



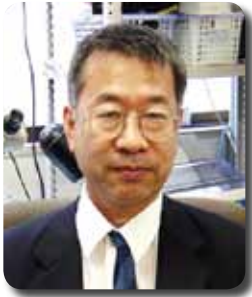
私にとっての滋賀医科大学

麻酔学講座 教授 野坂 修一

滋賀医大には、約22年近くお世話になりました。私は大学生時代、ボート部に所属し琵琶湖、瀬田川のレガッタに度々参加しました。しかし、医師になってからは、琵琶湖とは不縁でしたが、1991年7月に再び滋賀に赴任しました。これも何かの縁と思っています。

赴任した数年は、滋賀は関西でもすごく遠い地域とみられていましたが、今は、交通が発達し、京都、大阪から充分通勤可能な地です。大阪、京都での集会でも、JR一本で参加でき、便利になりました。地方によっては、交通手段を考慮しないで夜8時までの集会を計画しますと、場合によりその日の遅く帰宅との認識と伺いますが、関西ではそんな心配は不要です。また、東京で夕方まで集会があっても、その日のうちに十分帰宅が可能です。森と湖と雪がある地方です。私の同級生の何人かは関西を外れて赴任しましたが、関西には未練があるようです。滋賀医大を訪れる他府県の麻酔科医、特に都会の麻酔科医にとっては、この緑多き環境、立地条件には驚きを感じるようです。こう考えますと滋賀は恵まれた良い所と思います。ただし、地震はあるかもしれません。

教官として、学生、研修医、若手医師に接してきましたが、学生時代、若手の時はいろいろ体験してください。自己投資してください。滋賀医大にいつか戻り大学人として歩んでください。私自身は退任後、多分、他の医療系大学で再び教官として歩んでいますが、そのスタンスは滋賀医大でのスタンスと同じにしたいと考えています。このようなスタンスを許容させていただいた大学、病院の皆様には感謝いたします。滋賀医大の今後のますますのご発展を心から祈念申し上げます。



滋賀医科大学での30年 締めくりのご挨拶

臨床検査医学講座 教授 岡部 英俊

私は本年3月末をもって臨床検査医学講座教授を退任しますが、1984年7月に京都府立医科大学第一病理学講座助手から本学附属病院検査部講師として越智幸男教授の下に赴任し30年を過ごし、助教授を経て1997年9月より越智教授の後任として、検査部、病理部、輸血部を担当させていただきました。私が本学で病理診断を受け持った期間は、免疫染色や In situ hybridizationのような分子生物学的な手技が、順次日常病理診断業務に取り入れられた時期にあたります。私にとっては、これらの技術の導入が比較的容易であった大学病院という場で、それらの技術や知識を学びつつ業務でき、臨床各科と一定の信頼関係を築け、病理医としては、幸運でした。

その一方私が臨床検査医学講座の教授に就任した20世紀末には、日本経済低迷と、国家財政の長期にわたる悪化のため、今世紀当初に国立大学の独立行政法人化が実施され、文科省からは病院経営の合理化が求められ、検査部では、検体検査部門のブランチャラボ導入検討を求められましたが、技師長以下のスタッフの努力の結果、自主運営を続けることができまし

た。この時期に、近畿に一校ブランチャラボを取り入れた私立大学が1校ありましたが、病院の診療へのデメリットが大きい事が判明し、近年自主運営に戻されました。このような経緯を見るにつけ、ブランチャラボ導入を防げたことは、単に検査部のためのみならず、本学附属病院の発展のためにも良かったと思います。

既に、本年4月以降の私の後任には、以前本学附属病院病理部に在籍し、現在国立がんセンターに所属しておられる九嶋亮治先生が就任されることに決まっております。今後は、新たな本学出身教授のもとで、現スタッフともども、臨床検査医学講座ならびに滋賀医科大学が、地域貢献のみならず大学の英語名にある Medical ScienceのUniversityとして更に発展される事を祈念しつつ退任のご挨拶に替えさせていただきます。



定年退職に当たって

家庭医療学講座 教授 三ツ浪健一

滋賀医科大学に奉職したのは1978年4月で、附属病院が開院する半年前のことでした。医師になって5年目となり、そろそろ研究を開始して自らの専門性を高めたいと思い出した頃でした。そんな時に、生まれ故郷に新しくできた大学の内科学第一講座初代教授である河北成一先生から声をかけていただいたのは大変幸運なことでした。

新しい大学の新しい講座で、新しい研究を開始しました。与えられたテーマは心筋代謝研究でした。ゼロからの出発でしたので、まずは実験モデル作成が容易な虚血心筋代謝から取り組むことにしました。虚血境界域の心筋内ATPや乳酸を測定して、心筋のviability（生存能力）判定ができないかを調べました。これをヒト心筋に応用するために、磁気共鳴スペクトロスコピーに挑んだところ、一定の成果が得られ、やっと世界の中でもユニークな研究として認められるようになりました。いつの間にか、研究開始から20年の歳月が経っていました。夢を求めた20年でした。

1998年3月からは、附属病院に新設された総合診療部に移り、臓器別あるいはそれ以上に細分化・専門

化した医療では解決できない問題に、非選択的・包括的に対応できる総合医の育成を目指しました。このためには、一人の医師が全ての基本診療領域の二次医療にまで参加できるような総合診療病棟を稼働させることが理想ですが、大学病院ではなかなか困難で、実現することができませんでした。文部科学省から支援を受けた地域貢献特別支援事業や現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）・地域医療等社会的ニーズに対応した医療人教育支援プログラム（医療人GP）による新しい医学教育プログラム開発が評価され、2008年1月には新しい臨床医学講座である家庭医療学講座を開設していただきました。これにより2011年には家庭医療専門医1人を育成することができました。しかしその後、講座スタッフの補充がつかず、後継者を見つけられないまま定年となり、転身後16年で大学からの総合診療医輩出は幻となりました。今後は自らが、地域で役に立つ総合診療医になれるよう、もう少し学び続けたいと考えています。36年間、大変お世話になりました。地域でお目にかかることがありましたら、声をおかけください。



滋賀医大同門の矜持

公衆衛生看護学講座 教授 安田 齋

35年余にわたる滋賀医科大学での勤務を終えて、医者・教育者としての最終章を迎えるに至りました。昭和53年10月1日附属病院開院時、滋賀医科大学に奉職した時は独身でした。その後、結婚、2児の親となり、米国への留学、神経内科と糖尿病内科の専門医取得、病棟医長、医局長、神経内科科長、看護学科教授、看護学科での教育、孫の誕生、父の死、と私自身の個人史の中で、人生の主要な局面を滋賀医科大学在籍中に迎えてきました。

我々、団塊世代は、戦後日本の中を、貧困時代、高度成長期、オイルショック、低成長期時代、二度の大震災、高齢社会、地球温暖化など、“劇場型社会”ともいべき世相を生きてきました。目まぐるしい時代の変化、価値観の変化、人生65年の間に、このような時代の急激な推移は、ある意味、明治維新をも凌駕するのではないかと振り返ります。

時代の変化は医療についても当てはまり、我々が大学を卒業した頃は、疾病の病態が明らかでないものも多く、その診断基準も曖昧でした。治療法が確立していないので、何もしないで静観せざる得ないこともあり

ました。医学の急速な進歩により、現在では、最新の治療をしないことが医療訴訟に発展しうるので、逆に医療が細分化、専門化せざるを得なくなったように思います。臨床医にとってはストレスが大きく、ややもすれば過剰診療になりうる時代になりました。患者さんとの関係も、鷹揚に話が弾んだ往時に比べ、今日では、患者さんの反応に、殊更神経を使い、言葉を選んで対応しなければならなくなり、電子カルテとも相俟って患者さんとの触れ合いが少なくなってきたように思います。

病めるヒトの精神構造は、健常人とは異なることがしばしばで、負の連鎖に陥っていることも多く、健常人である医師には、患者さんの内なる精神状態までは見えにくいように思います。また、患者さんとの触れ合いの中からしか、疾病治療の糸口が見えないこともあるように思います。同窓会の皆様方には、電子カルテの弊害を乗り越えて、患者さんとの対話を最優先し、患者サイドに立った医療を実践していただきたいと思います。



MRバカ

MR医学総合研究センター 教授 犬伏 俊郎

私自身はこのように人から呼ばれないように強く意識をして努力してきたつもりでしたが、今振り返ってみるとまさにこの通りの人生で、ジレンマに陥った私そのものであったと反省しています。

私が滋賀医大へ赴任する前は、アメリカの大学の医学部でNMR研究施設のdirectorをしていました。この職業は少し特殊で、MRの装置を理解していなければならず、さらにコンピュータのハード・ソフトウェアに関する知識が求められます。その上に、どのように測定すれば必要なデータが得られ、また、得られたデータを如何に解析するかユーザーの指導をするのも大事な仕事です。したがって、この職種は電気・電子工学、あるいは、物理の専門家が多く、私のような化学分野の出身者は稀でした。その上、外国人ときたら皆無で、当時は大変に珍しい存在でした。

実際に施設の責任者としての仕事は厳しいもので、独立採算制の自身の給料を含む施設運営費を獲得するためにgrant申請に明け暮れるのはもちろん、そのためには質の高い研究を実施して成果を出す必要があり、装置の更新にも力を注がなければなりません。

MR装置の寿命は5年程度といわれ、その間に装置の更新がかなわなければクビになるのはあたりまえ。同じ医学部の中でもX線結晶回折、質量分析、電子顕微鏡などの他施設と競争しながら、さらには、全米の大学と競り合って新しく装置を導入する予算を獲得して施設を維持するわけです。

このようにアメリカの大学で研究の最前線に身を置いたことから、日本の大学では学べなかったたくさんのことが経験できたと思います。その中で一つ気が付いたことは、医学部で仕事をしている研究者や大学院生のバックグラウンドの多様性です。私の施設で研究をしていた生理学者は電子工学出身、放射線科の准教授は天文学、癌の研究者は社会学、などとても紙面では書きつくせません。皆さんには幅広い視野で専門以外の分野にも目を向け、医学・医療に取り組みれんことを希望いたします。

第3回

Home Coming Day



Home Coming Dayを開催して

滋賀医科大学 化学・分子生物学講座(再生・修復医学)教授 小島 秀人(医3期生)

平成26年2月15日(土曜日)、第3回Home Coming Dayが滋賀医科大学同窓会「湖医会」の主催、滋賀医科大学の後援で開催されました。3期生の卒後30年目同期会が同時にあり、土曜日の午後2時からにもかかわらず、10名を越える同期生が参加してくれました。“同窓生が大学に帰学し、お互いの近況を語り合い、母校の現状を観学する記念日”との設立の願いは見事に実現されました。

「湖医会」副会長 金子 均先生より開会のご挨拶、また、滋賀医科大学副学長 服部隆則先生よりご挨拶と併せて設立以来の大学の輝かしい発展と今後の大学運営のあり方についてのご意見をいただきました。

引き続き、「私の卒後30年」として、懐かしい基礎医学研究棟に隣接するB講義室にて講演会を行いました。最初に佛教大学社会福祉学部教授(耳原総合病院小児科)武内 一先生より「小児科医として、医療を社会につなぐ」と題して、福祉医療に全力を投入してこられた先生のご経験と我が国の小児科医が取り組



むべき課題の指摘がありました。次に、磐田市立総合病院副院長(獨協医科大学特任教授)寺田雅彦先生より「地域の病院で総合医を育てて」と題して、日本を代表する研修教育病院を作り上げてきた先生の歩み、ならびご経験についてお話をいただきました。

講演会の後、高橋雅士、椎野顯彦、埴田和史の3期生の先生ならびに5期生の相見良成先生のご案内で、メディカルミュージアム、改築された大学、附属病院ならびにスキルズラボの見学ツアーを行いました。特に高橋先生からは附属病院に設置された放射線診断と治療に使用される最先端機器の紹介があり、一同感激の内に見学ツアーは閉幕となりました。なお、企画ならびに開催にあたり、諸処細々にわたり準備を進めていただいた「湖医会」事務局の皆様にご心より深謝いたします。



金子副会長



服部副学長



第3回

Home Coming Day



小児科医として、医療を社会につなぐ

佛教大学社会福祉学部教授／耳原総合病院小児科 武内 一 (医3期生)

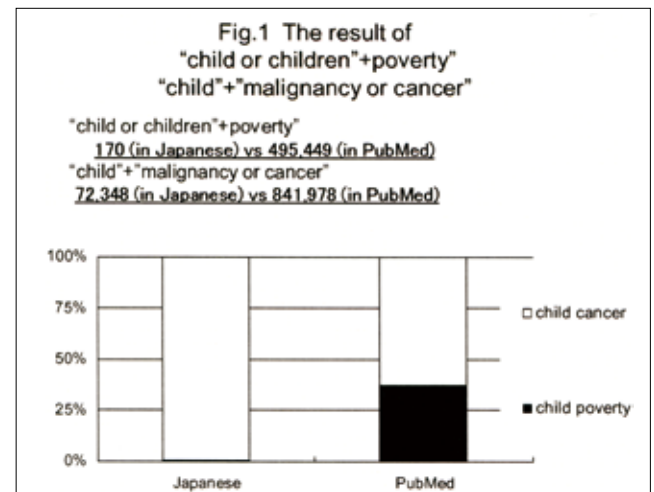
私の30年ですが、卒業後市中病院で小児科の研修をし、今も小児科勤務医を続け、5年前から社会福祉学部の教員をしています。私の田舎は小豆島で、4年間島の町立病院で勤務する中、抗菌薬を不必要に使わない診療を心がけたところ、肺炎球菌の耐性菌が激減し、それを論文にしました。この論文がきっかけで、抗菌薬適正使用のためのガイドラインを開業医の先生方と共に作ることができました。

(<http://www004.upp.so-net.ne.jp/ped-GL/GL.pdf>)

その後、2006年に新聞の特集記事で、髄膜炎を防げるワクチンの話を掲載いただき、今の「細菌性髄膜炎から子どもたちを守る会」の代表の髄膜炎当事者のお母さんが思いをもって相談に来られ会が発足し、署名活動や厚労大臣への陳情につながりました。この会の活動は、今も続いています。

(<http://zuimakuen.net/>)

その後私は、子どもの医療と福祉をつなぐ仕事、貧困や格差と医療の関係を研究したいとの思いを強くし、大学の教員を引き受けました。2011年東日本大震災があり、6-7人に1人の子どもが相対的貧困の中に暮らすことや格差が拡大していることが明らかとなっています。「なくそう!子ども貧困全国ネットワーク」の一員として、この問題が今の私の関心事となっています。
(<http://end-childpoverty.jp/>)



「卒後30年の同期会」 ～Home Coming Dayに参加して

石井整形外科 院長 石井 潤 (医3期生)

卒後30年の同期会。期待と緊張を胸に「Home Coming Day」に参加することにしました。参加を決めてからとても楽しみにしていた2月15日。前日から関東は40年ぶりの大雪となり交通網は大混乱。道も歩けない状況のなか何としても参加したい思いで、どうにか大学にたどり着きました。

30年ぶりの基礎講義実習棟B講義室の椅子はすっかりきれいになっていましたが、廊下を歩いていると学生時代の自分が思い出されます。服部隆則

副学長のお話の後、武内 一君 (耳原総合病院小児科・佛教大学教授)、寺田雅彦君 (磐田市立総合病院副院長) の講演を拝聴し、出席していた同期からも活発に意見が出され、大学の力になって欲しいなどの話も出て30年前のクラス討論に戻ったようでした。学内・病院を同期の案内で見学させてもらい思いも更に高まり、琵琶湖ホテルでの懐かしい面々53名との再会も、大いに盛り上がりました。



初期研修医が集まる魅力ある 研修プログラムとは

磐田市立総合病院 副病院長 寺田 雅彦 (医3期生)

私の勤務する地域でも、日本の他の地域と同様に医師不足に悩まされています。大学からの医師派遣にたよることが出来なくなった現在、我々のような自治体病院でも独自に医師を集める努力が必要になっています。

当院では、2003年から初期研修医を募集してきましたが、2009年以降10～12名の定員に対してほぼフルマッチを維持し、この10年間で延べ100名を超える初期研修医を獲得してきました。

講演では初期研修医を集めるための「魅力ある研修プログラムや試み」について自らの経験からお話をしました。

以下にその要旨を箇条書きで記載します。

1. 教育担当医師を置く
2. 教育カンファレンスを定期的に行う
3. 必要な知識は座学でしっかり教える
4. 耳学問の機会をたくさん提供する
5. 病院がたえず研修医を見守っていることを示す
6. 研修医を主治医にする
7. 手技をたくさんさせる

8. 各科ローテーション開始時に各自の研修目標を確認する
9. 出来る限り自由度の高いローテーションにする
10. 研修医は夜のERで成長する
11. Teaching is learningを実践する
12. 快適な研修環境を整える
13. 田舎だけど国際的
14. 飲み会やイベントを頻繁に開く
15. 学生見学・研修はどんどん受け入れて、丁寧に対応する

マッチング結果の変遷

年度	見学者数	定員	マッチ数	一位希望	応募数
2003		5	2	1	1
2004	7	4	1	1	8
2005	13	6	6	6	15
2006	18	6	5	5	10
2007	41	8	8	12	19
2008	43	10	6	3	9
2009	58	10	10	11	17
2010	42	10	10	9	20
2011		10	10	11	25
2012		12	10	10	19
2013		12	12	13	23

同期会 卒後30年会

医3期生



30年ぶりの 再会

水戸済生会総合病院 心臓血管外科・呼吸器外科 部長
倉岡 節夫 (医3期生)

今みなまた会^えして、これ共にあ^あい値えるなり(親鸞聖人「教行信証」)。鶯啼く偕楽園の梅の蕾がゆっくりふくらむ頃、30年の時間はつと消え、学生時代の思い出の記憶は昨日のように甦りました。特にこの10年間3期生は息災であり、物故者がいないことが何より幸いです。多くの方々は要職に就かれ、現役世代の最前線の責任ある立場で日々粉骨砕身働いておられます。当日駆け込み出席、また残念ながら欠席となった方々も、理由は患者を守るが故でした。社会福祉や医療行政に携わる者、大学で研究と教育を継続する者、基幹病院でコマンダーとして働く者、開業して地域医療を支える者も忙殺される日常から解放され、琵琶湖のおだやかな小波の如く一時の安寧を感じました。

私の住んだ京阪瓦ヶ浜駅沿いのかつてのシェアハウスは今も使われており、お世話になった家主婦人(82歳)はやさしく聡明な方です。

30年ぶりに懐かしく歓談し、再会を期して手を取り合いおいとまごいとなりました。



人生いろいろ

卒後30年同期会に参加して

獨協医科大学精神神経医学講座 主任教授
下田 和孝 (医3期生)

10年ぶりに懐かしい顔がたくさん見えた。2014年2月15日という記録的な大雪の日に、それも忙しい盛り年代が50数名も集まるとは大した学年である。世話役の埜田和史君の報告によれば、この10年間に故人となったものがいないとの報告があった。

宴席では参加者全員から近況報告があった。個人的な印象ではあるが、卒業当初にspecialityとしていたこととは違う方向に進んでいるものが多いことである。苦勞して身に着けた技術を結局は生かせない我が国の医療の現状があることについても考えさせられた。もうひとつは前回の卒後20年同期会の時の近況報告に比べると「管理者としての苦勞」「医院の運営状況」「自己の疾患ないしは身体状況」の報告が多くを占めていたと思う。なかには「そんな小さいこどもがいるの?」とか「キリマンジャロに登頂した?」と驚かされるような話も聞けて大変楽しかった。

藤田資文君の最近の口癖のとおり、「人生いろいろ」であった。



同期会 卒後20年会 医13期生



草津総合病院
一般・消化器外科 医長
一瀬 真澄 (医13期生)

36名の懐かしい面々は、北は旭川医大で講師をされている藤田征弘君から南は長崎大学で病理の教授に就任された

福岡順也君まで全国から集まりました。関西の参加者が多かったようですが、配布された出席できなかつた友人のコメントに目を通したり、出席者のスピーチで他の人の近況報告などを聞くことができました。小林勝弘君は今もアメリカで放射線科をしていて、メディア報道にもでてくる岩本あづささんは今も東南アジアを中心に大活躍されているようです。

出席者は自分の大学受験の時の受験票?の写真と卒業アルバムの写真のスライドの前でみんなに冷やかされながら近況報告をしました。二次会も大勢が参加して、大学で頑張っている人、開業している人、市中病院でやっている人、子供が滋賀医大に合格した人などなど、楽しい話で大いに盛り上がり、えっもう12時?とお開きまであつという間でした。

幹事の尾関祐二君、林寛子さん、前田清澄君、事務局の方々、お手伝いの学生の方々、本当にありがとうございました。



社会保険滋賀病院 泌尿器科 部長 坂野 祐司 (医13期生)

関東では記録的な大雪となった2月15日、ロイヤルオークホテルにて「卒後20年同期会」が開催されました。北は北海道旭川、南は九州長崎から、同期35名が集まりました。

受付でお会計を済ませると、怪しげなくじを引かされました。私はそこで、見事この原稿を書く権利を引き当てました。集合写真を撮影した後、幹事前田清澄先生の湖医会会費の納入を促すいたって事務的な挨拶の後、これもくじで権利を引き当てた大久保(旧姓大塚)貴子先生の乾杯の発声で会が始まりました。幹



京都市立病院 病理診断科
部長
岩佐 葉子 (医13期生)

10年同期会は欠席したので、同じ分野(病理)に進んだ同期生以外とは本当に20年振りの再会で、お互いに覚えてい

るかしたら?とドキドキしながらの参加であった。圧巻は会半ばの「参加者の近況報告」。何とステージ上のスクリーンに受験票の写真と卒業時の写真が並べて写し出されたのだ。予期せぬ、有難いと言うか、お恥ずかしい演出に、悲鳴に近い歓声があがったのは言うまでもない。受験時と6年後の卒業時と20年後の現在の自分をお見せしながらの近況報告となった。短いスピーチの中にも、皆それぞれの分野で、それぞれのライフスタイルにあわせて活躍していることがよくわかったのは、やはり広い意味での同業者の集まりであるからかなと思う。年次的には現在も既に、また今後も職場の中核にいて、時に苦悩したり、疲弊することもあるかもしれないが、また、次の30年同期会(あるのですか?)でも無事な姿(?)で会えることを願っております。

最後に、学年幹事の皆様、当日お手伝いして下さった「湖医会」事務局の学生さん、大変お世話様になりました。有難うございました。



事林寛子先生の司会で、参加者が順次近況報告のスピーチを行いました。その際、大学受験時の願書の写真と卒業アルバムの写真が会場に映し出され、一部どよめきが起こりました。途中、昨年開催された、6年生で他界した藤原好さんをしのぶ会の模様が伝えられました。2次会は同ホテルのバーで行われました。遅れてきた幹事尾関祐二先生も合流し、終電近くなつたところでお開きとなりました。

幹事の先生方ご苦労様でした。30年目もよろしくお願ひします。

同期会 卒後10年会

医23期生



滋賀医科大学耳鼻咽喉科 助教
戸嶋 一郎 (医23期生)

平成26年2月15日、琵琶湖ホテルで滋賀医科大学23期生の卒後10年同期会が開かれました。前日が全国的に記録的な大雪だったにもかかわらず、31名の参加者がありました。

一次会では入学時の写真を前にして一人ずつスピーチをし、結婚、出産、子供のこと、仕事のことなど、みんなのこの10年間の話に大いに盛り上がりました。卒後10年も経つとそれぞれの進路も、大学や市中病院の中堅医師として臨床を頑張っている人や大学院で研究をしている人、診療所で働いている人や開業している人など様々でした。自分の置かれている場所で

みんな頑張っていることを知り、とてもうれしく思いました。同期のみんなと久しぶりに会って近況を語り合うのは楽しいもので、あっという間に一次会、二次会と過ぎてしまいました。次に同期会が予定されるのは10年後、卒後20年会でしょうか。健康にも気を付けて、みんな元気に再会しましょう。今回来られなかった人も10年後にはぜひ参加していただき、さらに盛り上がった同期会にしたいですね。

最後に、「湖医会」事務局の皆様、手伝ってくれた学生の方、幹事の相方の小出君、本当にありがとうございました。



同期会 卒後10年会 医23期生



京都府立医科大学附属病院
疼痛緩和医療部
福島 豊 (医23期生)

卒後10年の同期会に出席させていただきました。とても懐かしく、楽しい時間を過ごさせていただきました。幹事を努めてくださ

いました小出先生、戸嶋先生ありがとうございました。10年という長いようですが卒業したのはついこの間のようにも感じられます。出席されていた方々の近況を聞くと、医師としての臨床や研究に励んでいる人、子育てをしながら頑張っている人など、10年という期間で人それぞれいろいろな人生を歩んでいることが印象的でした。また、同期の先生方がいろいろなところで活躍されている話を聞くと嬉しくもありました。卒後10年といいますと今後のことを決めていく時期にさしかかっておられる方も多いと思います。このような機会に同期の先生方と再会出来たことで自分にとってもいい刺激となりました。次回の同期会にも是非とも参加させていただきたいと思っております。最後になりましたが、皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。



滋賀医科大学アジア疫学
研究センター 特任助教
久松 隆史 (医23期生)

平成26年2月15日、「卒後10年同期会」が琵琶湖ホテルにて開催されました。診療・研究や家庭等で忙しい中、また遠方に在住している人も多

数いる中、皆よく集まったなと思います。皆ありがとうございます。

卒後10年の同窓会でまず考えることは、おそらく、どのように変貌しているか、ではないでしょうか。集まってみて、これはいい意味で予想が外れました。10年ぶりに会った人も多かったのですが、外見上は驚くほど変貌をとげている人はまだいませんでした（やはり私の頭髪が一番…）。更に10年後に開催される卒後20年同期会の方が断然興味深いですね。

順に語られた近況は十人十色でしたが、家庭や仕事で抱えている思い・悩みには共感できる部分も多く、そんな皆とゆっくり話げできたこの同期会はとても貴重な時間でした。

最後になりましたが、同期会開催に尽力いただいている「湖医会」関係者の皆様、幹事のお二人（小出君と戸嶋君）、本当にありがとうございました。それでは次回、10年後を楽しみに待っています。

同期会 卒後10年会 看7期生



滋賀医科大学医学部看護学科
臨床看護学講座精神看護学領域 教授
瀧川 薫

いやはや面映ゆい思いばかりが…

この度は、看護学科7期生の10年目同期会に参加させていただき、誠に有り難うございました。本当に楽しくおしゃべりさせていただき、懐かしくもあり、また全員が女性ばかりの参加者の中で些か面映ゆい思いをしながら過ごさせていただきました。

しかし、乳幼児から学童期にあたる子どもさん達が大勢いるなかで、嬌声や泣き声が入り乱れる戦場のような様相を示しつつ、皆さんちゃんとお母さんしているのに感心していました。やはり、昔取った杵柄ではありませんが、大学で学んだ看護の教育的成果がちゃんと自らの私生活にも役立っているということでしょうか。本当に皆さん、子どもさんの扱いがお上手なんですよ。わが子に対するだけでなく、どの子へも公平に言葉掛けをしながら愛情込めた関わりをされている。臨地・臨床における病者や障害者への看護という成果だけでなく、看護が一種の教養教育として機能している側面を垣間見た気がしました。

男性教員って、やはりどう頑張っても女子学生に対して遠慮や距離感を感じつつ、卒業時まで素直になれないものです。これは一般論ではなく、私個人の思いなのかもしれませんが、10年経ってもなんだかやっぱり気恥ずかしい思いで座っている自分が可笑しくもありました。授業では雄弁に話せるのに、何故こんなにも静かな態度で終始しているのかと、帰り際まで煩悶していた私でしたが、皆さんの近況をお聞きしたり、子どもさんのお相手をしたりと有意義な時間を過ごさせていただきました。心より、感謝申し上げます。



卒後10年同期会に参加して



西脇 小百合 (看7期生)

2013年10月に京都で開催された同期会は、恩師5名と7期生24名の出席でしたが、子ども連れの参加者が多くにぎやかな会となりました。卒後5年目の同期会に参加できなかった私にとっては、10年ぶりに顔を合わせる方もいましたが、本当に10年も経っているのかと思うほど外見は皆あまり変わっていないように感じられました。しかし、生活面では、私自身、結婚・出産、育児に仕事と、大学時代とは大きく変わってしまったように、同期たちの状況も変化しており、専業主婦や育休中の人、着実にキャリアアップしている人、様々でした。職業別にみると、看護師よりも保健師や養護教諭、その他の職業に就いている人のほうが多いような印象を受けました。数時間でしたが、皆の近況を聞き、自分とは異なる環境で働く人たちの話も聞くことができ、とても新鮮で楽しいひと時を過ごすことができました。このような素敵な会を開いて下さった幹事のお二人、「湖医会」の皆様、ありがとうございました。次回は何年後かな…? また皆様に出会えるのを楽しみにしております。

支部会

関東支部会に参加して

神奈川県立こども医療センター 皮膚科 部長
馬場(中嶋)直子(医3期生)



8月17日、「湖医会」関東支部会が、例年通り品川プリンスホテルで開催されました。この会は、今年で15回目を迎え、第1回目の平成11年から、1期生の久保田先生、2期生の加藤先生、河野先生、そして8期生の河崎先生が毎年幹事の労をとってくださって、毎年8月の土曜日に同じ場所で、東日本で働いている滋賀医大の卒業生、および卒後こちらで働きたいと思っている学生の親睦会として催されています。そして、毎回アップデートな講演会付きで、初期の頃は生物の土井田先生、生理学の横田先生、予防医学の山川先生など、懐かしい恩師の先生方のご講演を拝聴しましたが、最近では、卒業生で各方面でご活躍の先生方のご講演を拝聴し、他の分野の新しい話題に触れられて大変貴重な勉強をさせて頂くことができます。

今年も大変お忙しい中、滋賀から駆けつけてくださった馬場学長から最近の滋賀医大をめぐる話題提供のご講演に始まり、続いて今年横浜市立大学形成外科の教授になられた2期生の前川二郎先生のご講演を拝聴しました。馬場先生は、学生時代に大変熱心に講義や臨床実習をしてくださった頃と全然おかわりにならず、とてもお元気なご様子で、ますます母校のためにご活躍されていらっしゃるお姿を拝見し、懐かしく嬉しく存じました。

そして、前川先生の「超マイクロサージェリーによるリンパ浮腫の治療」のご講演には、大変感銘を受けました。私は前川先生の1年下の学年ですが、卒後、複数の科をローテートできる横浜市立大学で研修を

したいという思いから、1期生2期生の先輩方の後を追うように横浜に参りました。右も左も

全くわからない中で、最初の半年間第一外科で研修したとき、前川先生は既に2年目の研修医として頼もしくバリバリ働いていらっしゃるって、とても眩しくかつ頼りになる先輩でした。そして私が研修2年目に形成外科を回った時、前川先生は形成外科の唯一の新入医局員として、昼も夜もなくほとんど病院にいらして臨床と研究に没頭していらっしゃいました。その頃からの地道な弛まぬご努力が実って、このたび横浜市大の形成外科の初めての講座教授になられたことは、われわれ滋賀医大卒で横浜市大関連で働いている者にとって、とても誇らしく本当に嬉しいニュースでした。前川先生が素晴らしいご講演の最後に、われわれ後輩に向けて贈ってくださったメッセージ、①Never give up!②Be ambitious!!という言葉は、前川先生のこの30年余りのご自分の座右の銘であり、ご自身を鼓舞し続けてこられた魔法の言葉だったので強く感銘を受けました。この言葉を聞いただけでも、今回関東支部会に参加した甲斐があったとつくづく感じました。

その後、滋賀からわざわざ来てくださった2期生の渡辺同窓会長の乾杯の音頭で懇親会が始まり、中華料理をいただきながら、3人の現役5年生も含めて、先輩、同級生、後輩が一同に介し、和気藹々と貴重な楽しい

時間を過ごさせていただきました。また、来年もここで会えたら嬉しいですね!



関東支部

医学科5年 勝部 志郎

8月17日に品川プリンスホテルにて開催されました「湖医会」関東支部会に、今回初めて参加させていただきました。

横浜市大附属病院形成外科教授に就任された前川二郎先生から、リンパ浮腫治療のためのマイクロサージェリーについての講演を拝聴しまして、その治療効果の素晴らしさに感銘を受けました。講演後の懇親会では、OBの先生方から声を掛けていただき、関東でも滋賀医大OBの先生方が様々な分野でご活躍されていることを伺えました。どの先生方も後輩思いで、暖かい言葉を掛けていただき、本当にありがたく思いました。今回参加していた学生は数名でしたが、関東での就職を考えている滋賀医大生は、積極的に関東支部会に参加されることをぜひお勧めしたいです。OBの先生方に、御礼申し上げます。



医学科5年 坂野 嘉紀

2012年8月17日に「湖医会」の関東支部会に参加させていただきました。横浜市立大学の教授に就任された前川教授の講演や馬場学長のお話しなど、新しい知識を吸収できる貴重な機会となりました。引き続き行われた懇親会では、本学を卒業され、関東でご活躍されている先生方から、初期臨床研修に関するお話しや医師としてのキャリア形成のお話しなどを頂戴することができ、大変参考になりました。来年も機会が許せば、是非参加したいと考えています。最後になりましたが、このような機会を設けてくださった、関東支部会の諸先輩方にお礼申し上げます。ありがとうございました。

医学科5年 七里 圭子

以前から参加したいと思っていたのですが、今回初めて関東支部会に参加させて頂きました。関西以外で滋賀医大出身の先生にお会いする機会が今までなかなか無かったので、関東でご活躍されている先輩方とお話しさせて頂いて刺激を受けました。また形成外科に興味があったので、前川先生のマイクロサージェリーのご講演は大変勉強になりました。機会があればまた是非参加させて頂きたいと思います。

趣味の話 Refresh 題



Run for Love and Peace

福井赤十字病院 外科部長 藤井 秀則 (医5期生)

趣味のマラソンについて書かせていただきます。

大学時代はスキー部で距離部門の立ち上げにかかわり、ランニングは部活としても少しやっていました。西医体にはアルペンと距離の両方に出ていました。滋賀医大の外周はたぶん2.7kmだったと思いますが実習の待ち時間に走りました。

医者になってからは少しランニングからは遠ざかっていて、地元のマラソン大会の5kmとか10kmの短い距離に出るぐらいでした。

50歳近くになって、いつかはフルマラソンを走ってみたいなあと思っていたところに、第1回東京マラソンのことを知って応募し当選しました。これが初フルマラソンで日常的に走るようになったきっかけです。

専門は消化器外科で特に内視鏡外科手術を多く行っています。学会活動も忙しくてなかなか走る時間がとれないので走れるときに走っています。(宣伝ですが、2014年8月1日～2日には福井で

Reduced Port Surgery Forumという研究会をさせていただきます。関係のある先生がおられましたら是非福井へ来てください。)

学会出張も多く海外にも年に2回ぐらい行きますが、旅の準備はランニングシューズから始めます。海外では、治安には気をつけないといけません、新しい街では必ず一度は早朝に走ります。1時間ぐらい走るとだいたいその街のことがわかる気がしますし、早朝だと観光客もいなく、時差ぼけ解消の助けにもなると思っています。(写真①：ウィーン、写真②：サンディエゴ)

職場の福井赤十字病院には2005年にマラソン部を立ち上げました。部のキャッチコピーはRun for Love and Peaceです。赤十字病院対抗のスポーツ大会の駅伝に参加して、2011年には中部地区大会で3位に入賞しました。地元には福井マラソンという8000人以上が参加する市民大会があります。この大会だけは5kmに出場します。5kmにはチーム戦があって、1チーム4-5人のチームでその中の上位4人の合計タイムで順位を競うものです。毎年福井赤十字病院外科チームで参加しています。(写真③：2012年の福井マラソンでのチーム)

前述のように初フルマラソンは第1回東京マラソンで49歳の時でした。そのあと東京マラソンには第2回、第3回は当選して走りました。4回目はランニングドクター(RD:後述)で参加、第5回から7回はチャリティー枠で走りました。第8回目もチャリティー枠で走る予定です。というわけで毎年参加しています。年に一度の自分確認の大会になっています。東京までの旅費や寄付金など費用はかかりますが、チャリティーは誰かのお役に立っているの少し飲み代を節約すればそれも



写真①



写真②



写真③

またよし...と思っています。関西では大阪マラソン、神戸マラソン、なぜか名古屋ウイメンズマラソン(もちろんRDとして)に参加しました。そのような活動を通じて友人も多くできました。(写真④：神戸マラソンのRD)

フルマラソンはこれまでに15回ぐらい出ました。思い出に残る大会は2012年8月の北海道マラソンでした。ちょうど前日まで札幌で学会があったのでそのついでにという気持ちで出場しましたが、学会疲れと暑さがこたえて25km手前で足を痛め走れなくなり初めてリタイアしました。1年後に北海道には再挑戦しその時はなんとか4時間半ぐらいで完走しました。これも思い出に残る大会です(写真⑤：北海道マラソン)。

現在、僕は日医ジョギーズの一員(7月からは理事になります)としてRDとして多くのマラソン大会での医療救護にも参加しています。あの東京マラソンでタレントの松村邦洋さんを助けたのも僕らの仲間です。日医ジョギーズはランニング好きの医師、歯科医師のNPO

団体で、全国に400人ぐらいの会員がいて市民マラソンに参加して走りながら医療支援をするなどの活動をしています。そんな仲間との出会いを通じて、マラソン解説などで有名な金哲彦さんの結婚パーティに参加したり、チャリティーの関係で有森裕子さんも知り合いになりました。5月には黒部でのフルマラソンでRDとして参加して高橋尚子さんとも一緒に予定です。(写真⑥・⑦：金さんと有森さんと)。

僕は近所の道を走ることが多いのですが、ランニングは自由なので好きです。ゆっくり走ってもいいし、早く走ってもいいし、右に曲がってもいいし、戻ってもいいしやめてもいいし、僕にとっては心も体もすっきりします。忙しくて走れないと気分も憂鬱になったいします。逆に走っているときには頭もクリアになって手術や学会のアイデアが浮かんだりすることもよくあります。

マラソンの好きな方、日医ジョギーズに興味のある方は是非ご連絡ください。



写真④



写真⑤



写真⑥



写真⑦

私の仕事場

スポーツと精神医学



早稲田大学スポーツ科学学術院 教授 内田 直 (医3期生)

滋賀医大を卒業して30年になる。自分の人生を振り返ると、10年毎の周期があるように思う。最初の10年は、東京医科歯科大学の神経精神医学教室に入局し、初期研修、睡眠研究をはじめ、アメリカに行って帰ってきた。次の10年は東京都精神医学総合研究所に研究員として勤務し、睡眠障害研究部門にて部門長・副参事研究員を務めた。そして、10年前に早稲田大学スポーツ科学学術院に異動した。研究と教育については、ずいぶん経験を重ねたと思うが、今の職場は精神科医としてはユニークだと自分でも思う。しかし、とても楽しい。

真面目な方から話せば、スポーツ医学の中に精神医学はとても大切な分野でありながら、あまり手を付けられていないことを知るようになり、亡くなった日大医学部の永島正紀先生を手伝って日本スポーツ精神医学会を2002年に立ち上げた。現在、理事長をしているが、まだまだ小さな学会ではある。しかし、会員の働きで精神障害者のスポーツは大きく発展し、国際化の動きも出ている。また、うつ病患者に対する運動療法も、今動きつつある。うつ病はただじっと休んでいるだけでなく、健全な生活指導も大切であるという考え方も浸透してきた。現在外来診察を行っている日暮里のあべクリニックでは、近隣のスポーツジムとタイアップして、うつ病運動療法プログラムも始めている。

一方で、大学ではたくさんのアスリートと接する機会をもった。教員仲間には、競技関連で高名な人たちも多

い。同い年の岡田武史監督や瀬古利彦監督などと親しく話す機会もあった。自分は、そんなにスポーツの経験があるわけではないが、早稲田の教員の仲間は本当に優しく自分を受け入れてくれる。こちらも仲間になるため「都の西北」を風呂で練習したこともある。また、仲間になると精神科医としても仕事もとても多い。もともと学生メンタルヘルスというのは重要な分野だが、なかなか気軽に相談できる人がいない。特にスポーツ界ではそうなので、これまでも世界で活躍するアスリートを含め、幾つもの相談を受けた。

この正月は、箱根駅伝があった。自分のゼミ生が4名走った。どの学生もゼミで親しく付き合っている学生である。走ったのは第1区 大迫 傑。オリンピック候補である。競技に対するひたむきな姿。クールで、気が強い。この選手を含め、自分がサポートした選手は10人中5人いた。睡眠の問題をサポートした選手については、新聞でも紹介された。そんな5人を、写真の旗をもって応援した。現在は、オリンピックレベルの選手たちから相談を受けることもある。選手たちが気軽に相談できる精神科医がもっと増えると良いと思っている。

さて、医者になって30年経ったところで、次の10年はどんなふう to 過ごすのかなと思う。自分がこれまでやってきたことを、更に発展させられる10年にしたいと思っているが、何をするのか考えるのが楽しみな今日このごろでもある。



うつ病運動療法の風景



ゼミの学生と

キャンパス情報

変わりゆくキャンパス2013(その2)



滋賀医科大学附属病院医療情報部
教授 永田 啓 (医2期生)
前回ご紹介した疫学拠点(アジア疫学研究センター)とD病棟の1階の部屋(多目的室)が完成し、いよいよ病院駐車場のヘリポート工事が始まりました。

皆さんが多くの時間をすごした福利棟と体育館の耐震・改築工事も開始され、臨床講義棟も本格的な工事がはじまったので、学内はあちこち工事の音が響いています。仮講義室としてD病棟の1階の部屋をさっそく使っていますが、あちこちスペースが足りません。また、福利棟の工事の関係で、食堂が3月末まで閉鎖になり昼食時は大変です。生協の弁当販売や食事するために教室を開放するなどいろいろ対応はとっていますが、みんな不便を強いられています。駐車場も工事の関係で大幅に止められる台数が減ったので、臨時に図書館の前など普段は車が入らないところに駐車スペースを確保するなど、学内は大騒ぎです。

工事が竣工し実際の建物や設備が出来上がったら、順番に写真などで紹介したいと思います。



アジア疫学研究センター



D病棟1階多目的室



体育館(竣工間近)



福利棟(工事中)



ヘリポートと病院への
渡り廊下(工事中)

訃報 謹んで哀悼の意を表します。

平成25年10月13日

近藤 総一 (医2期生)

平成26年 1 月 1 日

平岡 俊佑 (特別会員：元生物学)

2013年度「湖医会」総会 議事録

日時／平成25年10月26日(土) 15:10~16:40

場所／看護学科棟第4講義室

審議事項

1. '12事業報告及び'12決算について
○原案（資料1-1、1-2）どおり承認された。
2. '13事業計画及び'13予算について
○原案（資料2-1、2-2）どおり承認された。
3. 会費等規程の一部改正について
○原案（資料3）どおり承認された。
 - ・看護学科系卒業会員・大学院会員については、卒業時・入会時に一括納入することとし、これに伴う事業内容の見直しを具体化していくこととなった。
 - ・医学科卒業会員については、40年（40回）分を納入したとき、または満65歳に達しそれまでの会費を完納しているときに、以後の会費を免除することとなった。
4. その他
 - ①支部の設置について
奈良県内に勤務又は在住する会員を構成員とする「奈良支部」の設置が幹事会で承認された旨の報告があった。
 - ②年会費（医学科卒業会員）の自動引き落としによる割引について
年会費自動引き落とし（口座振替・VISAカード）のすべての利用者について、2014年度分から年会費6,000円のところを5,000円に割引引くことが幹事会で承認された旨の報告があった。
 - ③降圧剤バルサルタンを使った臨床研究論文に関する問題について
大学の調査委員会が公表する調査検討結果及びその社会的反響等を含めた全体的状況について、同窓会は注視的対応をとることとなった。※各資料は「湖医会」HPを参照

年会費について（2014年度分から一部取り扱いが変更になります。）

①医学科卒業会員

会費の割引…自動引き落とし（口座振替・VISAカード）のすべての利用者は、年会費6,000円が5,000円に割引となります。

会費の免除…40年（40回）分を納入したとき、あるいは、満65歳に達しそれまでの会費を完納しているとき（本人からの申し出による）は、以後の会費は免除となります。

②看護学科卒業会員

終身会費…終身会費20,000円を卒業時に一括納入となります。（看17期生から）

- ・20,000円以上の既納者は、終身会員となります。
- ・20,000円未満の既納者は、20,000円との差額が納入された時点で終身会員となります。

お知らせ

「湖医会」年会費の自動引き落とし

口座振替をご利用の方は10月12日、
一般VISAカードの方は10月15日となります。



なお、便利な口座引き落としのご利用を
ご希望の方は事務局までご連絡ください!!

お名前・住所・開業・勤務先・メールアドレス等を変更の場合は、メールまたはファックスで事務局まですぐにご連絡ください。

表紙の写真：アジア疫学研究センター（右側）

ご協賛ありがとうございます 中外製薬株式会社